

## ○三番叟ノート（01）

垣澤社中さん（神奈川県厚木市酒井）が伝えている寿式三番叟付五人囃子、動画でご覧になった通りですが、家元（垣澤勉さん）から別の演出について伺ったことがあります。

先代（つまり勉さんの父上であります常蔵さん）の代から「ことぶきしきさんにんさんばそうつき寿式三人三番叟付ごにんはやし五人囃子」という演出を引き継いでいるとのこと。この演出は家元の地元であった酒井新宿子ども会などで里神楽を指導していた時の演出だったそうです。おそらく、子ども達の出番を増やしてあげよう、という先代の思いだったと推察しています。

神楽の家元は入門してくる後継者育成のための稽古の他に、小中高大学など学校教育の現場、社会教育の現場に出向いて地域の伝統芸能を理解してもらうおうと懸命に努力されていることがよく理解できる、演出だと思いました。

三番叟（男一人）め女三番叟（女二人）と五人囃子を付けた演出ですから、賑やかな舞台であったことが想像できます。ににんさんばそう二人三番叟（男だけ）の演出もありますが、これは現在でも社中で演じられています。

あとは、「三筒男」の後に式三番が呼び出されて舞う「ひとりさんば一人三番」という演出、さらに五人囃子も加えて出す演出も確認できます。

三番叟にあって、一番短い形式（演出）は、三番叟のみが登場する演出と底筒之男命の舞のあと三番叟の舞を披露する演出があります。逆に長い形式の演出では、伊邪那岐命の「みそぎ禊払い」から天照大御神、月読命、須佐之男命が出現した後、随神、三筒男（上筒之男命、中筒之男命、底筒之男命）の舞の披露があって、ようやく三番叟が呼び出され、そして五人囃子を出すものがあるそうです。いわば「通し」の演出です。この場合、神楽師の数や早替わりが必要なことと、舞台時間がたっぷり1時間30分ぐらい必要となります。これは、さすがに長時間。三番叟の通しの演出、いつか見たいと思っております。

さて、この動画では家元（垣澤勉さん）が大拍子を演奏されています。神楽を行う上で囃子方は重要な役割を担っています。舞方の所作や舞台の状況を的確に判断し、曲目を変えて舞台場面を演出します。大拍子が囃子全体の演奏をリードされている様子がよくわかります。

実際の神楽公演では、舞台の幕開けの前、「**ひとつ囃子**」（**註1**）で当日のお囃子の調子を整えるため演奏します。アイドルングみたいなものですが、いきなり本番となるとときもあります。

一方、三番叟を舞う神楽師は、「出の場面では、舞台に最初に登場するわけなので大変に緊張感があります。当日の祭りの雰囲気盛り上げるため、元気よく、激しく舞台を踏みしめ（相模では**三番叟を踏む**と言っています）舞台の幕開けと清め、そして五穀豊穰と天下泰平を祈る舞の意味を籠め、最後まで舞台が無事つとめられることを願って舞っています。特に相模の場合は、歌舞伎仕立ての大きな舞台（花道付）が多く、体力をかなり消耗します。真冬の舞台でもかなり汗をかきます。」とコメントされています。

次に、五人囃子の演出についても伺ったところ「神楽では、舞台回しをするもどき役が重要な役を担います。もどきは、人々に楽しみを与えてくれ、どこに行ってもお客様から喜ばれます。その意味では、三番叟と五人囃子が登場する硬軟取り入れた演出は、神楽の基本だと思っています。五人囃子が神楽殿に登場するだけでお祭りの雰囲気が和んでくることが分かります。そして、五人囃子が頑張れば、より一層、式三番叟の舞が引き立つ相乗効果が発揮できます。また、三番叟の時に出てくる五人囃子は、五人も集まったもどき集団でありオーケストラです。五人囃子は三番叟の脇役であると言う考え、私たち相模の里神楽では、そのように考えていません。第九回さいたま公演では、天太を含め、一人一人の個性がもっと表現できるような演出を考えました。それぞれがその力を発揮し、舞台を盛り上げ、祭りらしい雰囲気を作ってくれたな、と思いました。寿式三番叟と五人囃子が公演の成功の切っ掛けを作ったと言うのは過言ではない気がしました。」とのことでした。

家元の長女・垣澤瑞貴さんは、「神楽師は、囃すとか舞うという意識を強く持っているのですが、〈演じる〉という意識はあまり強くないのです。神楽師という呼称から役者と呼称変更すると〈演じる〉という意識は生まれるかもしれませんが、そこで、役者となって、どのようなもどきを劇場舞台上で表現しようか、五人囃子の方々にお願いしました。そういうことに挑戦したのがさいたまの公演でした」と述べられていました。劇場神楽は、神楽師の伝統的な心性に変えていくことがあることが確認できました。

さらに、家元（垣澤勉さん）は「余談ですが、先代は三番叟が終わると、今日の神楽は半分以上終わったようなもんだ、と言って、ご神前にお供えされている「三番叟の御神酒」を美味しそうに飲んでいました。

家元としては、神社での神楽奉納の前は、神楽師の員数集め、衣装、面、小道具の準備をしてお祭りの当日を迎えます。お囃子方を含め三番叟と五人囃子が

演じられれば、神楽を演じる人数も揃い、次の神楽に進めることが出来る、そんな安心感から生まれた言葉でした。そして、集まった神楽師たちも三番叟の御神酒で自らを清めるとして飲む気分は、安心と晴れがましさがありました。その意味では「三番叟の御神酒」(註2)は特別な意味があったような気がします。

さいたま芸術劇場では、三番叟が終わったあと、楽屋裏で飲むわけにはいきませんでした。」と、残念がっていました。

#### 註1

篠笛を用い「大宮、早、鎌倉、昇殿、印場」の順番で吹きます。特に最後の「印場」では「相模の切り笛」と呼ぶ特殊な演奏の終わり方になっています。

#### 註2

神社で神楽を奉納する場合、拝殿の御魂を神楽殿にお招きするため八足台を神楽殿正面に設けます。この設けた御神前に氏子の皆さんから御神饌物を捧げて頂きます。拝殿で行う一連の儀式と同様な考えです。

御神饌物としては「海」「山」「野」の三点です。「海」のものとしては、塩や鯛、「山」のものとしては、お酒(三番叟の御神酒です)、「野」のものとしては、その土地で収穫されたお米や野菜などです。この塩(波の華と呼ぶ)を用いて三番叟は舞台の四方を払い清めます。劇場神楽の場合で塩が巻けない場合は、切木棉(半紙を細かく切ったもの)を巻き払い清めます。

追記 本文を読んでいただきまして、あらためて動画再生をお願い申し上げます。本原稿は垣澤社中家元(垣澤 勉様)と次期、四代目家元(垣澤瑞貴様)にご指導いただいております。御礼申し上げます。

(文責・構成 齊藤修平)